

愛媛県松山市方言における青年層の 動詞・形容詞終止形のアクセント

久保博雅

1 はじめに

愛媛県松山市は従来「中央式アクセント」とされてきた。その一方で標準語化が進んでおり、秋山（2017）では1950年頃を境に式の消失（または曖昧化）を起し、その後、核の位置も変化して標準語アクセントに移行していることが述べられている。

本稿では松山市の青年層（10代後半～30代）における動詞・形容詞の終止形のアクセントを扱う。筆者を含めた4名の話者の調査結果を示し、それぞれのアクセントを記述する。本来ならばその他の活用形も扱うべきだが、今回は終止形に焦点を絞り、活用形については稿を改める。なお、本稿で述べる松山市方言とは平成の大合併（2005年）以前の市域で使用される方言を指す。また、本稿でアクセントの音韻的な型を表す場合、高起をH、低起をLで表し、下降の位置を数字で示す。式の対立がない場合は下降の位置の数字のみを示す。

2 先行研究

松山市方言の青年層のアクセントの研究として久保（2019）がある。久保は秋山（2017）の調査が従来の読み上げ方式であることを受け、その方式では過度に標準語化するのではないかという考えから、調査者が調査語を複数のアクセントで発音しそれぞれの使用使用を話者が判断するという方法で調査を行った。その調査に筆者自身の内省を加えた計3名の名詞アクセントを記述した結果、2名は式を保持していること、1名は式が消失し標準語化が進行していたが、部分的に中央式アクセントを保持していることがわかった。そのことから「式の消失は必ずしも起こっていない」「アクセントの標準語化は個人程度が異なり必ずしも様ではない」と述べた。また、式を保持している2名の居住地・生育地が市中心部から離れた地域であることから地域差がある可能性も示唆している。

松山市方言の用言アクセントの研究は、山内（1932）、杉山（1955）、平山（1957）、上野（1995）、秋山（2017）などがある。ここでは最も古い記述となる山内（1932）と、世代別に調査しアクセントの変化を追った秋山（2017）の2つを取り上げる。

山内（1932）は自身の内省から、2拍から6拍の動詞・形容詞のアクセントを記述している。山内は『国語年鑑』昭和54年版によれば明治35年（1902年）生である。まず動詞についてだが、音調は「平板式」「起伏式上下…型」「起伏式下…上型」の3つを設定しており、それぞれH0型、H1型、L0型に相当すると考えられる。以下に山内の内省のうち2拍と3拍の終止形を示す。山内はすべての語を片仮名で記しているため本稿もそれに倣うが、山内が漢字を示している語は本稿でも示す。また、山内は相対的に高い拍に傍線を付しているが、ここでは〔 〕で囲って示す。なお、H0型に傍線は付されていない。

○2拍動詞

H0型 イク、カス、クム（汲）^{（四段）}、キル（着）、ニル（煮、似）^{（上一段）}、エル（得）、ネル（寝）^{（下一段）}

H1型 [オ]ル^{（四段）}

L0型 カ[ク]、サ[ス]、ウ[ツ]^{（四段）}、ミ[ル]^{（上一段）}

○3拍動詞

H0型 タタク、オトス、ソダツ、ワラウ、アタル、カワル^{（四段）}、オジル^{（1）（上一段）}、アケル、ステル、キメル^{（下一段）}

H1型 [ア]マル^{（四段）}、[オ]キル、[ノ]ビル、[オ]リル^{（上一段）}、[ウ]ケル、[タ]テル、[サ]メル^{（下一段）}

L0型 アル[ク]、カク[ス]、アソ[ブ]^{（四段）}

H1型には2拍動詞上一段活用語と下一段活用語、L0型には2拍動詞の下一段活用語、3拍動詞の上一段活用語と下一段活用語の記述が欠けている。H0型のタタク、オトス、ソダツについては、1拍目が相対的に高い、すなわちH1型の語にもなるという。一方、ワラウ、アタル、カワルには「この類の外は、三音節語は大部分平板式と上下下型と両型をとる」と併記されている。H1型アマルにも「之ぐらゐの外はみな〔イタム〕の様に平板式にもなし得る」と併記されている。これらのことから、山内自身が一旦はH0型、H1型に分類しているが、両型で揺れる語もいくつかあるということがうかがえる。

次に形容詞について、山内は「みな上々々下下型である。」と述べており、これは以下の例と併せると拍数が増えようとも後ろから3拍目が核を担う型であると解釈できる。

2拍形容詞：[ナ]イ 3拍形容詞：[ト]ーイ、[ワ]ルイ、[コ]イー

4拍形容詞：[アカ]ルイ、[ハゲ]シイ 5拍形容詞：[オモシ]ロイ、[アトラ]シイ

6拍形容詞：[ウラヤマ]シイ、ア[ラアラ]シイ

「アラアライシ」のみ語頭から高くしていないが、ほとんどの語において語頭が高く後ろから3拍目が核を担う型（2拍語のみ1拍目に核）であることが分かる。一方、「エー」「ヨイ」だけは「下上型」とも述べているが、山内は「ナイ」の方が例外と見なしている。

秋山（2017）は世代別に調査を行い、アクセントの変化の過程を分析している。調査対象の世代は第1世代（～1934年生、6人）、第2世代（1935年生～1944年生、6人）、第3世代（1945年生～1954年生、5人）、第4世代（1955年生～1964年生、5人）、第5世代（1965年生～1974年生、17人）、第6世代（1975年生～1984年生、11人）、第7世代（1985年生～、5人）となっており、読み上げ式の調査を行っている。秋山は複数の活用形を扱っているが、ここでは終止連体形のみ紹介する。以下に秋山で述べられたアクセントの変化をまとめたものを示す。（ ）内は上記の世代を簡略化した表記である（ex. 第1 = 第1世代、第3前 = 第3世代前半）。

○2拍動詞

1類五段：H0型（第1～3前）→0型（第3後～第7）

1類一段：H0型（第1～3前）→0型（第3後～第7）

2類五段：L0型（第1～3前）→1型（第3後）→0～1型（第4・5）→1型（第6・7）

2類一段：L0型（第1～3前）→0～1型（第3後～第5）→1型（第6・7）

3類五段⁽²⁾：H1型（第1～3前）→1型（第3後～第7）

○3拍動詞

1類五段：H0型（第1～3前）→0型（第3後）→0～2型（第4～第6）→0型（第7）

1類一段：H0型（第1～3前）→0型（第3後・4）→0～2型（第5～第6）→0型（第7）

2類五段：H1型（第1）→H1～H0型（第2）→H0型（第3前）→0型（第3後）→0～2型（第4・5）→2型（第6・7）

2類一段：H1型（第1）→H1～L0型（第2）→L0型（第3前）→0型（第3後）→2型（第4～第7）

3類五段：L0型（第1～3前）→0～2型（第3後～第5）→2型（第6・7）

○形容詞（2拍・3拍）

2拍：H1型（第1～3前）→1型（第3後～第7）

3拍1類・2類：H1型（第1～3前）→1～2型（第3後）→2～1型（第4～第7）

どの品詞、活用においても第3世代前半まで式を保持していたことがわかる。2拍動詞は第3世代後半から標準語化が起きるが、第3類については「〈下げ核〉の有無と位置とい

う点でみると、古くからの体系を保持している」と述べている。3拍動詞では第2世代で五段活用が1類と同じH0型に、一段活用が3類と同じL0型に変化する。しかし第3世代後半以降では標準語化が起こる。その後、第1類が2型に変化する動きが起こるが、これも完了せず標準語化が起こる。これについて秋山は「類推変化とともに共通語化⁽³⁾によって、均一性が失われてしまったことから、体系性を回復しようとして起きた再編と考えられる」と述べている。

形容詞は2拍、3拍ともにH1型で、3拍は類が統合していたが第3世代後半以降標準語化により2型が現れる。第4世代以降はその2型が1型より多く見られるようになる。

ここまで松山市方言における用言アクセントの先行研究を見てきたが、周辺地域における用言アクセントの研究についても確認しておきたい。周辺の京阪式アクセント地域の用言の研究として、山岡(2016)が挙げられる。山岡は、兵庫県(淡路島含む)、大阪府、和歌山県、徳島県、高知県において、合計14地点で若・中・高年層の世代別調査を行った。まず動詞について、山岡が問題にしているのは3拍動詞第2類である。第2類は伝統的にはH1型をとるが、近世後期以降に五段活用が第1類と同じH0型、一段活用が第3類と同じL0型をとるようになったとしている。しかしながらこの変化には地域差があるため、山岡は上記の地域で変化の進行を検討している。結果を述べると、地域的には淡路島北部、大阪府南部、和歌山県北部が高年層から第1類と統合している。逆に高知では全世代で古い形を保持している。淡路島の一部の地域の高年層や徳島の高・中年層にも古いアクセントが残っているが、その下の世代は第1類と統合している。地域差はあれど、3拍動詞第2類の五段活用がH1型からH0型へ、一段活用がH1型からL0型(またはL2型)への変化は共通である。

次に形容詞だが、中井(2002)は京阪式アクセントにおける3拍形容詞は、中央部ではH1型に統一、周辺部ではH1型とH2型の区別をとると述べている。山岡の調査においては、ほとんどの地域においてH1型が得られ類の統合が見られるが、大阪・和歌山の2地点の高年層でのみH2型が得られたとしている。

山岡(2016)で述べられた京阪式アクセント諸地域と松山市を比較すると、3拍動詞第2類の変化が共通する。高知など古形を保つ地域もあるが、松山市では秋山(2017)が述べたように「第2世代」の時期に変化が起こっている。3拍形容詞は少なくとも山内(1934)の時代からすでにH1型一型であり、秋山の調査でもH2型は確認されていない。

3 調査概要

本稿で記述するアクセントは次の4名の話者によるものである。話者A～Cは久保

(2019) の話者 A～C と同一人物である。

話者 A 筆者。1991年生。男性。2010年3月まで松山市に、2010年4月以降は徳島県および広島県に居住。

話者 B 1994年生。男性。外住歴無し。

話者 C 1987年生。男性。2006年4月から2011年3月まで神奈川県に外住歴あり。

話者 D 2000年生。女性。2018年3月まで松山市に、2018年4月以降は愛知県に居住。

話者 A・B の居住地は1955年に松山市に編入した旧伊台村に、話者 D の居住地は1944年に松山市に編入された旧道後湯之町に属する。話者 C の居住地は市制施行時から松山市の地域である。調査方法は、話者 A は内省、話者 B～D は調査者 (= 筆者) が調査語に接続する主部を発話し、それに続けて調査語を発音してもらうという方法でアクセントを記録した。その理由は、従来の読み上げ方式では過度に標準語化したアクセントになり、実際の発話で使用しているアクセントが得られにくいと考えたためである。その上で、調査者側から複数のアクセントパターンを提示し話者に判断してもらう方法を取った。また、日常で使用するアクセントを得るために必要に応じ例文の作成をお願いする場合もある⁽⁴⁾。以下に、調査時の会話例を示す。() 内の表記は、L が相対的に低い拍、H が相対的に高い拍を表している。

筆者：(「振る」を聞きたい時) バットを…

話者 B：バットを 振る 棒を 振る

筆者：振る (LH) ではなくて 振る (HH)

話者 B：そうですね バットを 振る (LH) ではなくて バットを 振る (HH)

なお、調査語については、話者間で数語の相違はあるが、おおよそ一致している。また、調査語は言い切り形で発音してもらっており、終助詞などは付いていない。

4 各話者のアクセント

話者ごとに音調型の所属語彙を見ていく。話者 C は式の対立が確認されなかったため、H・L は表記していない。また2拍形容詞において、話者 A・B は「濃い」が、話者 A・B・D は「酸い」がそれぞれ長音化し3拍で現れる。話者 A の「濃い」と話者 B の「酸い」は2拍の場合と3拍の場合の回答を得たため2拍形容詞に含め、長音化した場合の発音を [] 内に、音調型を () 内に記載する。話者 B の「濃い」と話者 A・D の「酸い」は長音化した場合しか得ていないため、3拍形容詞に含める。話者 C は「良い」を「イー」と発音しているため、こちらも [] 内に記す。その他の調査語は、語形、発音ともに標準語と同じである。

4.1 話者 A

○2拍動詞

H0型 言う、行く、売る、置く、押す、貸す、汲む、死ぬ、積む、飛ぶ、泣く、振る
(1類五段)、着る、煮る、似る、寝る (1類一段)、する (1類サ変)

H1型 食う、居る (3類五段)

L0型 巻く (1類五段)、会う、有る、打つ、書く、出す、立つ、取る、吹く、蒔く、読む (2類五段)、得る、出る、見る (2類一段)、来る (2類カ変)

H0型～H1型 買う、聞く、咲く (1類五段)

○3拍動詞

H0型 歌う、続く、眠る、登る、拾う (1類五段)、上げる、当てる、消える、着せる、捨てる、足りる、載せる、腫れる、惚れる、詫びる (1類一段)、騒ぐ、習う (2類五段)

H1型 鳴らす、笑う (1類五段)、煽ぐ、余る、動く、思う、泳ぐ、帰る、曇る、下がる、頼む、通す、通る (2類五段)、掛ける、下げる、詰める (2類一段)、隠す、参る (3類五段)

L0型 生きる、受ける、見せる (2類一段)、歩く、入る (3類五段)

H0型～H1型 当たる、飾る、変わる、殺す、並ぶ (1類五段)、枯れる、出来る、曲げる (1類一段)、払う、開く、休む (2類五段)

H0型～L0型 送る (1類五段)

H1型～L0型 上がる、遊ぶ (1類五段)、作る (2類五段)、起きる、落ちる、建てる、逃げる、延びる、晴れる (2類一段)

○2拍形容詞

H1型 濃い [or コイー (L2型)]、良い

L0型 無い

○3拍形容詞

H1型 赤い、浅い、厚い、甘い、薄い、遅い、堅い、暗い、遠い (1類)、青い、熱い、うまい、多い、惜しい、黒い、寒い、白い、近い、強い、広い、深い、欲しい、若い、悪い、からい、狭い、高い、長い、苦い、早い、低い (2類)

L2型 酸い [スイー]

4.2 話者 B

○2拍動詞

H0型 言う、行く、売る、置く、押す、買う、貸す、聞く、咲く、死ぬ、積む、飛ぶ、泣く、振る、巻く (1類五段)、着る、煮る、似る、寝る (1類一段)、する (1類サ変)、蒔く (2類五段)

H1型 居る (3類五段)

L0型 汲む (1類五段)、会う、有る、打つ、書く、食う、出す、立つ、取る、吹く、読む (2類五段)、得る、出る、見る (2類一段)、来る (2類カ変)

○3拍動詞

H0型 上がる、当たる、歌う、送る、飾る、変わる、殺す、続く、鳴らす、並ぶ、眠る、登る、拾う、笑う (1類五段)、上げる、当てる、枯れる、消える、着せる、捨てる、足りる、出来る、載せる、腫れる、惚れる、曲げる、詫びる (1類一段)、煽ぐ、泳ぐ、帰る、曇る、下がる、騒ぐ、頼む、通る、習う、払う、開く、休む (2類五段)

L0型 遊ぶ (1類五段)、作る (2類五段)、受ける、起きる、落ちる、掛ける、下げる、建てる、詰める、逃げる、延びる、晴れる、見せる (2類一段)、歩く、隠す、入る (3類五段)

H0型～H1型 余る、動く、思う、通す (2類五段)、生きる (2類一段)

H1型～L0型 参る (3類五段)

○2拍形容詞

H1型 酸い [or スイー (H1型)]、良い、無い

○3拍形容詞

H1型 赤い、浅い、厚い、甘い、薄い、遅い、堅い、暗い、遠い (1類)、青い、熱い、うまい、多い、惜しい、黒い、寒い、白い、近い、強い、広い、深い、欲しい、若い、悪い、からい、狭い、高い、長い、苦い、早い、低い (2類)

H1型～L2型 濃い [コイー]

4.3 話者 C

○2拍動詞

0型 言う、行く、置く、押す、買う、貸す、聞く、着る、咲く、死ぬ、積む、飛ぶ、泣く、煮る、似る、振る (1類五段)、寝る (1類一段)、する (1類サ変)

1型 売る、汲む、巻く (1類五段)、会う、有る、打つ、書く、食う、出す、立つ、取る、吹く、蒔く、読む (2類五段)、得る、出る、見る (2類一段)、来る (2類カ変)、居る (3類五段)

○3拍動詞

0型 上がる、当たる、歌う、送る、飾る、変わる、殺す、続く、鳴らす、並ぶ、眠る、登る、拾う (1類五段)、上げる、当てる、枯れる、消える、着せる、捨てる、

足りる、出来る、載せる、腫れる、惚れる、曲げる、詫びる（1類一段）、余る、思う、泳ぐ、下がる（2類五段）

1型 帰る、通す、通る（2類五段）、入る、参る（3類五段）

2型 遊ぶ、笑う（1類五段）、煽ぐ、動く、曇る、騒ぐ、頼む、作る、習う、払う、開く、休む（2類五段）、生きる、受ける、起きる、落ちる、掛ける、下げる、建てる、詰める、逃げる、延びる、晴れる、見せる（2類一段）、歩く、隠す（3類五段）

○2拍形容詞

1型 濃い、良い [イー]、無い

○3拍形容詞

1型 遠い（1類）、多い、からい、狭い、長い、苦い（2類）

2型 赤い、浅い、厚い、薄い、遅い、堅い、暗い（1類）、青い、熱い、うまい、惜しい、黒い、寒い、白い、近い、強い、広い、深い、欲しい、若い、悪い、高い、早い、低い（2類）

1型～2型 甘い（1類）

4.4 話者D

○2拍動詞

H0型 言う、行く、売る、置く、押す、買う、貸す、聞く、汲む、咲く、死ぬ、積む、飛ぶ、泣く、振る、巻く（1類五段）、着る、煮る、似る、寝る（1類一段）、する（1類サ変）、蒔く（2類五段）

H1型 食う（2類五段）、居る（3類五段）

L0型 会う、有る、打つ、書く、出す、立つ、取る、吹く、読む（2類五段）、得る、出る、見る（2類一段）、来る（2類カ変）

○3拍動詞

H0型 上がる、遊ぶ、当たる、歌う、送る、飾る、変わる、殺す、続く、鳴らす、並ぶ、眠る、登る、拾う、笑う（1類五段）、上げる、当てる、枯れる、消える、着せる、捨てる、足りる、出来る、載せる、腫れる、惚れる、曲げる、詫びる（1類一段）、煽ぐ、余る、動く、泳ぐ、曇る、下がる、騒ぐ、頼む、習う、払う、開く、休む（2類五段）

H1型 帰る、通す、通る（2類五段）

L0型 作る（2類五段）、生きる、受ける、起きる、掛ける、下げる、建てる、詰める、逃げる、延びる、晴れる、見せる（2類一段）、隠す、入る（3類五段）

L2型 参る (3類五段)、落ちる (2類一段)

H0型～H1型 思う (2類五段)

H0型～L0型 歩く (3類五段)

○2 拍形容詞

H1型 濃い

L0型 無い、良い

○3 拍形容詞

H1型 遅い、暗い、遠い (1類)、青い、熱い、多い、黒い、寒い、近い、強い、広い、
欲しい、悪い、からい、狭い、苦い、早い (2類)

L2型 赤い、浅い、厚い、甘い、薄い、堅い (1類) うまい、惜しい、深い、若い、高
い、低い (2類)、酸い [スイー]

H1型～L2型 白い、長い (2類)

5 考察

2拍動詞は話者A・B・DがH0型、H1型、L0型の3つの型を持つ。各型の所属語彙は話者間で多少の異なりはあるが、ほぼ一致した。この結果は標準語化が起こる前のアクセントに一致する。一方話者Cは0型と1型の2つの型を持ち、それらの所属語彙は標準語と等しいことが分かる。

3拍動詞は個人で異なる結果を示す。話者AはH0型、H1型、L0型の3つの型を持ち、最も古いアクセントに一致する。所属語彙を大まかに見ると、1類語がH0型、2類語五段活用がH1型、2類語一段活用がL0型で古形を保持しているように見える。しかし、2類語一段活用がH1型とL0型で揺れるものもある。他方、先行研究で見られたような2類語五段活用のH0型への変化は少なく、1類語がH1型とH0型で揺れているのが特徴的である。話者B・Dは似た結果を示しており、有する型はH0型、H1型、L0型の3つだが、H1型はわずかである。両者とも多くの2類語五段活用はH0型に、2類語一段活用はL0型に所属しており、2類語の古い形(H1型)からの変化が完了したアクセントであることがわかる。話者Cは0型、1型、2型の3つの型を持ち、標準語アクセントとはほぼ同様である。なお、1類語で2型をとる語があるが、秋山(2017)の第4～第6世代頃に起きた変化と同質のものかは不明である。

2拍形容詞は、先行研究ではH1型であったのに対し、話者Aは「無い」のみ、話者Dは「無い」と「良い」でL0型が得られた。「良い」については秋山(2017)の調査でもL0型が頻出しており、秋山はこれを「例外語」とみなしている。山内(1935)においても「良

い」については「下上」と記述されていることから、伝統的な松山市のアクセントはL0型であったと考えられる。一方「無い」については、秋山の調査においてもほとんどの話者はH1型で、L0型は第2世代に1名のみである。「無い」がL0型をとることについては「良い」からの類推、もしくは京阪のアクセントの影響（中井（2002）によると「無い」はL0型）なども考えられるが、ここでは可能性を指摘するに留めておく。話者BはすべてH1型、話者Cはすべて1型で確認された。また、先にも述べた通り、話者A・Bでは「濃い」が、話者A・B・Dでは「酸い」がそれぞれ長音化し3拍で現れた。杉山（1961）を見ると「濃い・酸い」は[コ] イー、[ス] イーである（[]内は相対的に高い拍）との記述があるため、元々この2語は長音化するものだったと考えられる。しかし、杉山は1拍目が高い型としているが、話者Bの「酸い（スイー）」を除いては、L2型で実現する（もしくはH1型とL2型で揺れる）のが特徴的であり、伝統的なアクセントとは異なっている。

3拍形容詞は、「濃い」「酸い」を除くと話者Aと話者Bが同様の結果であり、類の区別なくH1型一型であった。話者Cは1型と2型の2つの型を持ち、多くは2型である。標準語アクセントにおいては1類が0型、2類が2型だが、話者Cからは0型は見られず、2型に一型化しようとする様子が見えがえた。話者DはH1型とL2型の2つが確認された。動詞では比較的古いアクセントを保持していた話者Dだが、3拍形容詞ではその半数近くが標準語アクセント第2類と下がり目が一致するL2型で実現し、標準語アクセントの干渉が見えがえた。

以上、4名の話者のアクセントを確認してきた。この結果から、久保（2019）で述べた「松山市のアクセントは均質ではない」ということは動詞・形容詞においても同様であると言えるだろう。また久保は地域差の存在可能性も示唆したが、本稿ではそれがより顕著に現れた。各話者の特徴を簡潔に述べると、話者A・Bは比較的古い世代のアクセントを保持、話者Cは標準語化が著しい、話者Dは動詞は古い世代のアクセントを保持しているものの形容詞は標準語の干渉を受けている、と言える。先に各話者の言語形成地を述べたが、話者A・Bの旧伊台村は市中心から北東に位置する周囲を小高い山で囲まれた盆地であり、話者Cは旧市街地である。話者Dの旧道後湯之町は旧市街地と旧伊台村の中間に位置する。したがって少なくとも今回のデータから、市街地に向かうほど標準語化が顕著という傾向が示せたといえよう。ただし、わずか3地点4名の話者で地域差の存在を明言するのは早計である。これについては今後も慎重に検討していきたい。

6 まとめと展望

本研究では、話者に自発的に発音させることで日常に近いと考えられるアクセントを得

ることができた。4名の調査結果からそれぞれ異なった様子のアクセントを確認したが、標準語化が進行している話者がいる一方で、先行研究で述べられている3拍形容詞2類語五段活用の変化前後のアクセントが青年層でも保持されているのは注目すべき点だろう。

今後の課題は、やはり活用形のアクセントの記述を行うことである。松山市の青年層において各用言が活用した場合にどのようなアクセントをとるのか、詳しく調べる必要がある。より充実した記述を行い、松山市におけるアクセントの実態を明確にしたい。

注

- (1) 「オジル」は「おそれる（怖じる）」の意か。
- (2) 金田一（1974）では3類は設定されていないが、ここでは秋山（2017）の記述通り3類を設ける。
- (3) 本稿では秋山（2017）における「共通語化」と「標準語化」は同じ意味として扱う。
- (4) 話者が自発的に例文を作成した場合も多くある。

参考文献

- 秋山英治（2017）『愛媛県東中予方言のアクセントと共通語のアクセント—日本語史再建のために—』おうふう
- 上野善道（1995）「松山市方言のアクセント調査報告」『愛文』30
- 金田一春彦（1974）『国語アクセントの史的研究 原理と方法』塙書房
- 久保博雅（2019）「愛媛県松山市方言における青年層の名詞のアクセント」『国語教育研究』60
- 国立国語研究所編（1979）『国語年鑑 昭和54年版』秀英出版
- 杉山正世（1955）「愛媛県方言の甲種系統アクセント」『愛媛国文研究』4
- 杉山正世（1961）「方言の実態と共通語化の問題点 10 愛媛」『方言学講座 3 西部方言』東京堂
- 中井幸比古（2002）『京阪アクセント辞典』勉誠出版
- 平山輝男（1957）『日本語音調の研究』明治書院
- 山内千万太郎（1932）「松山方言のアクセント研究」『方言』2-3
- 山岡華菜子（2016）『京阪式アクセント地域におけるアクセント変化の研究』博士論文、早稲田大学

（広島大学大学院教育学研究科博士課程後期）